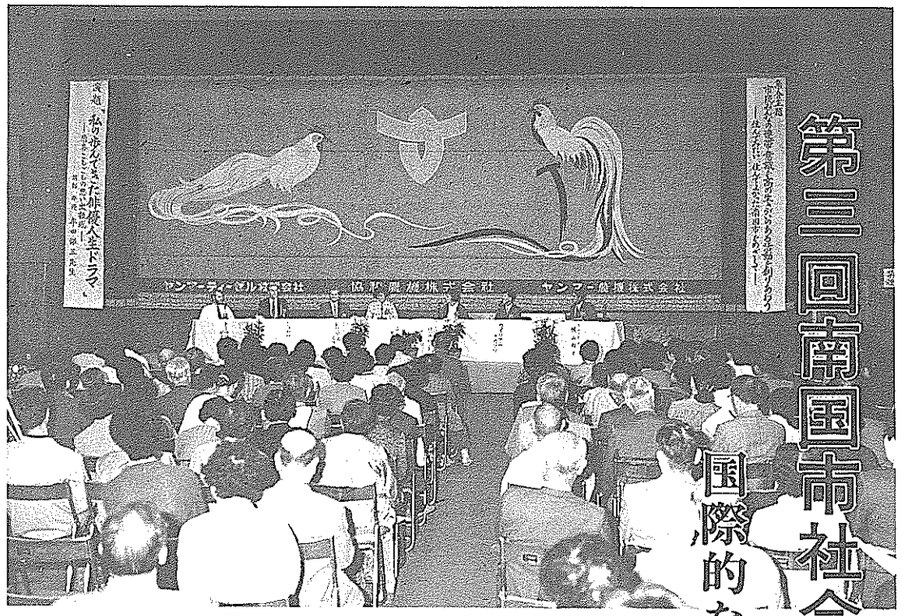
第三回南国市社会教育研究集会

国際的な視点で教育を考える



第三回南国市社会教育研究集会が、十一月三日の文化の日に市民体育館で、約五百人が参加して開かれました。

これは、生涯教育の必要性が叫ばれているなかで、社会教育を振興して市民の生きがいを創造し、潤いのある文化活動の活性化を図ることを目的に、一昨年から行われているものです。今年は「市民みんなの連帯意識を高め、生きがいのある活動を創りあおう」を主題にして開かれました。また、今年は「親と教師の海外教育事情視察」も実施されるなど、本市の教育における国際化元年とも言える年です。そこで、その一環として六人の外国青年に日本についての意見を述べてもらうシンポジウムも行われました。

シンポジウムの参加者は、県下で中学生や社会人の指導にあたっている英語指導助手の皆さん。アナウンサーの横山和正さんをコーディネーター、意見者の一人のウ

祝辞を述べる市長

イリアム・ナカマツさんを通訳に、日ごろから抱いている意見が率直に語られ、会場を埋めた参加者は熱心に耳を傾けていました。

また、途中で会場に来ていたインド出身のシャルマンさんが飛び入り。「教育は家庭からと考えている。三歳までの基盤作りが重要で、母親の役割が最もたいせつ。厳しさと甘さのバランスをうまくとって、子供にもう少し厳しく」と家庭の重要性について話していました。

シンポジウムで出た主な意見は次のとおりです。

○家庭教育は非常に大事であるが、日本では親といっしょに何かをしたり、遊んだりするという一番大事な時間が少ない。一方、祖父母といっしょに暮らす時間が多いことはすばらしい。

○生徒が授業中に騒いだりしても先生が怒らないのはどうしてか。

○六年間も英語を勉強するのは入試などの試験のためで、卒業すれば忘れてしまい、役に立たない。それよりはコミュニケーションのための英語を勉強すべきである。また、英語を全員に学ばせるのではなく、興味がある生徒が選択できるようにしてはどうか。

○私たちを見ると「外人さん」と言うが、それを聞くと嫌な気持になる。たいせつなのは外見ではなく心である。

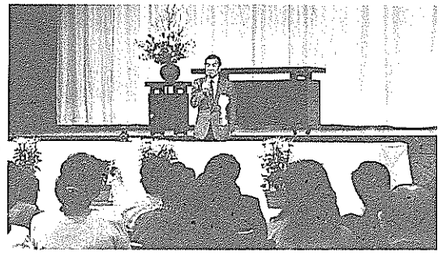
○日本人には失敗をしたくないという気持ちがあるようで、何か劣等感を抱いているように見える。また、相手の話をよく聞かず、一部だけ聞いて、勝手に想像でイメージを描いてしまうことが多い。

シンポジウムの後、俳優の牟田悌三さんが「私の歩んできた俳優人生ドラマ」と題して人間としていかに生きてきたかを講演。その趣旨は次のとおりです。

―悲喜こもごもの思い出雑感―

私の歩んできた俳優人生ドラマ

牟田　悌三氏（俳優）



今日のテーマは「私の歩んできた俳優人生ドラマ」ということですが、俳優である人生ドラマといっても大したことはありません。一人の社会人としてどういう風に生きてきたかというなかで私の変化をお話ししたいと思います。

私の子供たちが中学校に入り、三人目が中学校に入ったとき、私はPTA会長をすることになりました。そのようなときに非行の問題が押し寄せてきました。PTAでも大変な議論になりましたが、子供たちをどのように監視していくかという議論しかなされていませんでした。しかし、非行の問題が起こる原因を分析してみると全部大人社会の縮図です。自分のことだけしか考えない親の子供は見事にそうなっているように、大人のまねであり、大人が意識を変えなければ本質的には改まらない問題であることに気がつきました。

民主主義はよいことですが、民主主義というのは、人間の尊厳を守るために、全体のことを常に考えなければなりません。ところが、時代とともに全体が影が薄くなり、個だけが残ります。それはもはや個人主義ではなく利己主義です。

科学文明は人間を幸せにしてないところがあります。情報文明もそうです。座っていても情報が来て生活していけます。従って全部受け身の生き方になりつつあります。自分から求めて見つけていくなかで感動があり、物をたいせつにしていくという循環があるのですが、現代は不足が不足しているということをPTA会長をやっているときに感じました。そうなると人間は何もかもあたりまえになり、こちらからほしいという意欲がわきません。二年間PTAをやり、何か子供たちに不足の状態を伝えられないかと思いました。

そしてある日「あった」と思いました。その不足というのが障害という不足です。障害を持っている人が我々の周りにいます。そういう人とお付き合いすることによって、科学文明を持ってしても補うことのできない不足に直面する状態を作ってはどうか、その不足をカバーするエネルギーを見てもらったらどうかと思いました。そういうことを見ることで人間が生きるということはどういうことかを揺れ動く時期に考え、感じてもらったらどうかということを考えて、中学生と障害を持った中学生が交流するという活動を国際障害者年から始めました。

五ヵ月間活動して、最後の全体会のときに体験発表会をやりました。司会を受け持ったのですが、胸がいっぱいになってしゃべれなくなるくらいすてきな発表をしてくれました。班のテーマの歌を作詞、作曲して歌ってくれた班やファッションショーの形で障害者を紹介してくれた班、はり絵の序幕をしてくれた班がありました。野球ばかりした班もあり、自分たちでルールを作りながらやったのを記録して見せてくれました。

中学生の時期は純粋なだけに相手の気持ちになろうとしたらほんとうに相手の気持ちになれるのです。相手が何がほしいのか、何を望んでいるのかが、我々大人になるといろいろなことを考えてしまいますので、わかりにくくなるのですが、あの時期はわかってしまうのです。あっという間に心底お互いに親しみ、ほんとうの友達になってしまいます。問題のある中学生などではなく、いつのときでも限りない可能性を持った中学生なのだと私は痛感しました。そして大人たちが子供たちにそのチャンスをあげることをさぼっていたことを痛切に感じました。

あの時期に体験を通して入ってきたものはその人の一生を左右していくものではないでしょうか。バランスのとれた人間を我々は育成していかなければならないと感じました。そのようにして障害者とのお付き合いが始まり、いろいろな活動をやっています。

ボランティアは文化だと考えています。ボランティアはいいことではなく、人間誰しも持っていることを出し合うことです。一方的に差し上げるのではなく、ちょっと目を凝らし、耳を澄ますと相手からいろいろなことをいただけることであり、結局やり取りなのです。それがこれからの文化を作っていきます。南国市ではここ独特の文化を作っていっていただきたいのです。それぞれの個性を持った土地で人間と人間がいてできていくのが文化です。

最後にクラークさんのお話をします。クラークさんが弟子と別れるときに「青年よ、大志を抱きなさい。しかし、金を求める大志であってはならない。利己心を強める大志であってはならない。名声というあのつかの間のものを求める大志であってはならない。人間としてあるべきすべてを主張する大志を抱きたまえ」と言ったのです。人間としてあるべきことがときどきゆがんでしまいますが、皆さん人間としてあるべきことを主張して生きていっていただきたいと思います。